

## [第657回 大阪放送番組審議会議事録]

1. 開催日時 令和5年5月18日(木) 午後2時00分～3時00分

2. 開催場所 大阪放送 大会議室

3. 委員の出欠 委員の総数 6名

出席の総数 6名

出席委員の氏名 成瀬 國晴 河内 厚郎  
たつみ 都志 鎌田 雅子  
上林 寛和 徳永 潔

放送事業者側出席者の氏名

吉田 禎宏 赤松 加枝子  
原田 年晴

4. 議題

1) 番組審議 『こちら港区552』

2) その他

5. 議事の概要

議題1) 『こちら港区552』について、番組の企画意図と内容を説明し、意見を聞いた。

社 側

地元根ざした放送を目指す。私たちが頻繁に使うこのフレーズを、言葉通り履行できているだろうか。実態はどうだろう。この自問を着想にスタートしたのが当番組。大阪市港区だけに焦点を当てる地元密着番組、「こちら港区 552」です。港区の「ヒト」「モノ」「企業」を毎週ひとつ現地取材で取り上げています。大阪市港区、郵便番号「552」。港区の知られざる一面、街とそこで生きるヒトの魅力を、全国に向けて発信しています。

<各委員のご意見>

委 員

オープニングの波の音やカモメの音がするBGMの後、ベンチャーズの音楽が流れた。この音楽のギャップが、都会でもあり、港町・下町である港区を表している。港区は駅前に大きな道路と電車が交差していて、駅前には少し寂しい感じ。立ち飲み不動は小さなお店なので良く見つけられたと思う。光文具のいとうさんは緊張するそぶりもなく話されていて驚いた。今の商店街の実態を分かりやすく語っていらっしやった。どのようにインタビューする人を探してきているのか、リサーチ力を感じる。また、原田アナウンサーの話を引き出す力がやはり凄い。食事のシーンのシズル感もさすが、他の人にはマネできない熟練のスキルだと思った。港区は昔から住んでいる人も多く、知る人ぞ知る名店も多くて掘りがいがあるので、これからも港区の色々な場所を取材して発信して欲しい。

委 員

港区がどのような場所なのか知らなかったのも、冒頭にどのような場所でもどのような歴史がある街なのか、外観の説明があると港区以外の人にもイメージしやすい。インタビューを受けていたお二人とも雄弁で話し慣れていた。不動さんは長い間教壇に立たれていた事もあり話し上手で、今後どのような話になるのか気になった光文具さんは歴史の話を軸にされていた。番組を聴くと、お店に行ってみたいと思える。お二人とも面白かった。

委 員

立ち飲み不動のお店に来られるお客さんの高齢化が進んでいるという話題は港区の今を表しており、そういう話をリスナーは期待していると思う。話を通じて地域が浮き彫りになっていく流れがとても良かった。光文具のご主人はとつとつと、商店街の高齢化や、シャッターを下ろす店が増えている事などネガティブな事を話されていて、これも商店街の現状を表していた。総じてこれはオーラル・ヒストリーの番組。何気ない、人との会話を通じてその地域がその時どういう風だったかが分かる。長年続ける事によって文化的価値が出ると思う。ぜひこれからも続けて欲しい番組。

委員            いい番組だなあと思いながら聴かせて頂いた。立ち飲み不動はどうやって見つけたのか気になった。不動さんという人物の面白さ。思い切って人生を歩みだすと様々な発見がある、立場が違うと見え方が違うという事を感じた。街の息遣いが不動さんの言葉の中から伝わってきた。

委員            港区に「潮の香り」「夕風」など、港町のイメージが無かったが、話を聴いているとやはり港町なのだと感じた。大阪に住んでいても、港区の事を知らない人は多いと思うので新鮮な面白さがある番組。自分の個人史と街の歴史が重なって行って、改めて見えてくるものがある。特に港区は定住している人も多い。このまま続いて欲しい番組。

委員            声の手紙から始まる構成がにくい。非常に丁寧な番組だと感じた。港区で色々な人から話を聴く事によって、点が面になっている。原田さんは客観的な立場で色々な話を聴き出すテクニックがあり、人当たりが良く、穏やかに会話が弾む。原田さんでないとできない番組。15分という時間も丁度いい。港区に住む人の魅力が広がり、港区そのものの魅力に繋がっている。そこは意識しなくても良いので、これからも楽しんでインタビューして欲しい。ポッドキャストから喫茶マルキの回を聴いたが、自分が行っていたマルキのパン屋の記憶が蘇ってきた。現在の話でも、過去に繋がっている。総じて港区に根差した番組になっている。

社 側            貴重なご意見、ありがとうございました。

以上